

神奈川県立大和高等学校

万葉樹木園資料

【目次】

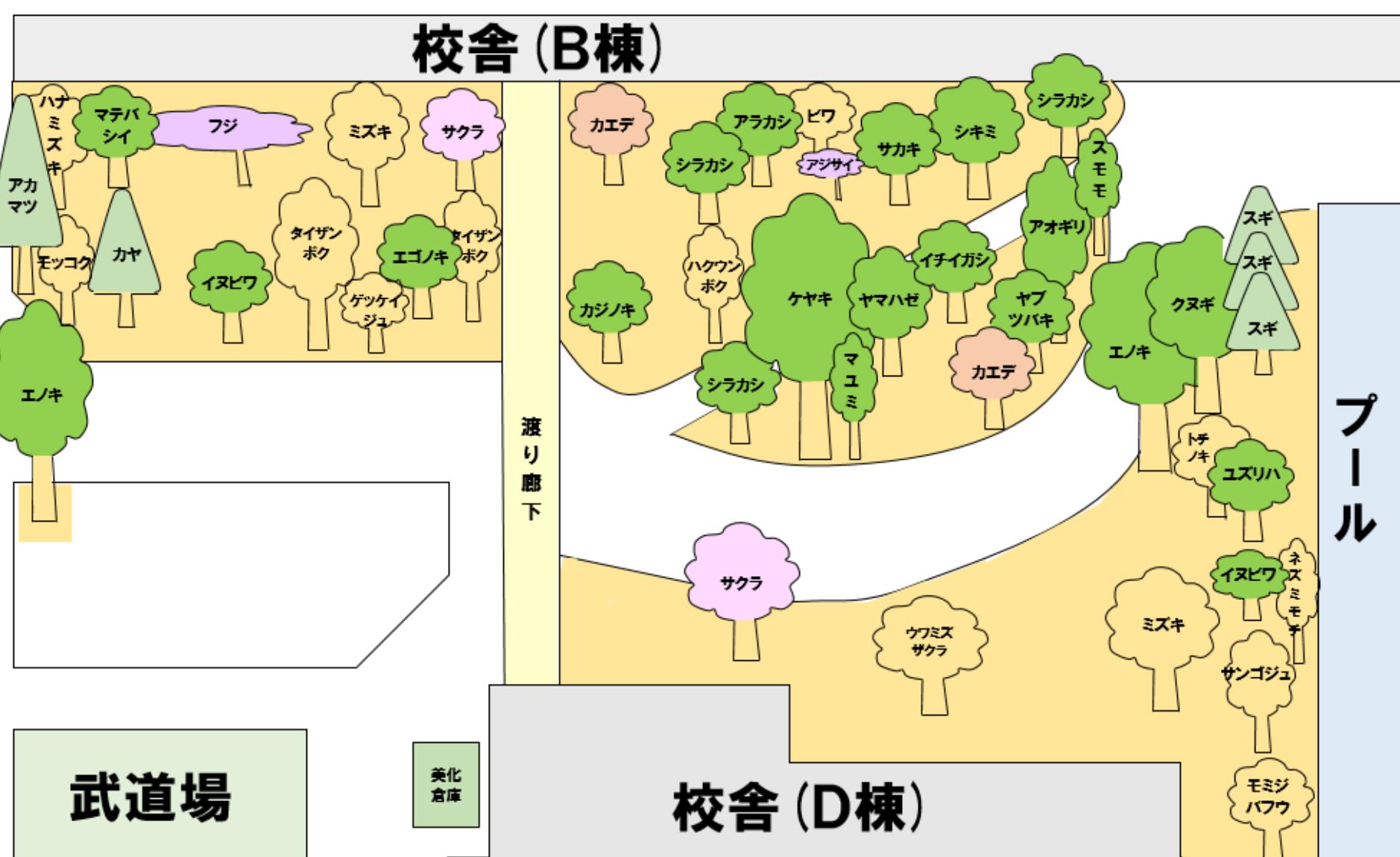
万葉樹木園樹木分布図

万葉樹木と万葉集の歌

大和高校敷地内に植栽されているその他の万葉樹木

発行 令和2年6月

万葉樹木園 樹木分布図



「万葉樹木と万葉集の歌」

凡例

和名（現代名）写真
万葉歌 ◎原文（万葉仮名）▽訓み下し文

◆現代語訳 作者（巻-番号）



◎霍公鳥 来喧五月尔 哭尔保布 花橘乃 香吉 於夜能御言 朝暮尔
不闻日麻祢久 安麻射可流 夷尔之居者 安之比奇乃 山乃多乎里尔
立雲乎 余曾能未見都追 嘆蘇良 夜須家奈久尔 念蘇良 苦伎毛能乎
奈吳乃海部之 潛取云 真珠乃 見我保之御面 多太向 將見時麻泥波
松柏乃 佐賀延伊麻佐祢 尊安我吉美 御面謂之美於毛和

▽ほどとざす 来鳴く五月に 咲きにほふ 花橘のかぐはしき 親の御言 朝夕に 聞かぬ日まねく

天離る 鄙にし居れば あしひきの 山のたをりに 立つ雲を よそみ見つ 嘆くそら

安けなくに 思ふそら 苦しきものを 奈吳の海人の 潜き取るといふ 白玉の 見が欲し御面
直向かひ 見む時までは 松柏の 栄えいまさね 尊き我が君 御面、これを「みおもわ」と謂ふ

◆ホトトギスが来て鳴く五月に美しく咲く花橘のように、香り高い親の御言葉を、朝

夕に聞かない日が久しく、田舎にいるものですから、山の窪みに立つ雲を遠く見るばかりで、嘆く気持ちも安らかでなく、思う気持ちも苦しいものですが、奈吳の海人が潜つて取るという真珠のように、見たいと思うお顔を、向かい合つて見る時までは、（松柏の）瑞々しくいらっしゃってください。大切なお母上。「御面」は「みおもわ」と言う。

◎磐白乃 濱松之枝乎 引結 真幸有者 亦還見武

▽岩代の 浜松が枝を 引き結び ま幸くあらば またかへりみむ

◆岩代の浜松の枝を引き結んで、幸いに無事であつたら、また帰つて来て見ることであらう。

有間皇子（巻一一四一）

言う。

大伴家持（巻一九一四一六九）

◎ 知智乃實乃 父能美許等波

播蘇葉乃 母能美己等

於保呂可尔 情盡而 念良年

其子奈礼夜母 大夫夜

无奈之久可在 梓弓

須恵布理於許之 投矢毛知

千尋射和多之 劍刀 許思尔

等理波伎 安之比奇能

八峯布美越 左之麻久流

情不障 後代乃

可多利都具倍久

名乎多都倍志母



◎ 藤浪之 花者盛尔 成来 平城京乎 御念八君

▽ 藤波の花は盛りになりました。奈良の京のことをお思いなされますか。あなたは。

◆ 藤波の花は盛りになりました。奈良の京のことをお思いなされますか。あなたは。

大伴四綱(巻三一三三〇)



◎ 足比奇乃 山櫻花 因並而 如是聞有者 恒戀因夜裳

▽ あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば はだ恋ひめやも

◆ 山の桜の花が、これから何日も今のように咲いているのなら、こんなにひどく心惹かれることはないだろうに。

山部赤人(巻八一一四二五)

の人々が語り継ぐように、高い名を立てるべきだろう。 大伴家持(巻一九一四一六四)

◆ (ちちの実の)父君が、そして(ははそ葉の)母刀自が、おざなりな心の痛めようで思う、そ
んな子どもであるものか。ますらおたる者は、ただ何の手柄もなしていいものだろう
か。梓弓の弓末を振り起こして、投矢を手に持つて千尋の遠くまで射通し、剣大刀を腰にさ
して、(あしひきの)たくさん尾根を踏み越え、下命をうけたその志を押し通して、後世

ちさ

(エゴノキ)



◎呑門之 榆實毛利喫 百千鳥 ここ者難來 君曾不來座

▽我が門の 榆の実もり食む 百千鳥 千鳥は来れど 君そ来まさぬ

◆我が家の門の榆の実をついばむ百千の鳥、数多くの鳥は来るけれども、あなたは

あなたは心が移つてしまつたのであろうか。

作者不詳(巻七一一三六〇)

え・榎

(エノキ)



かえるで
(カエデ)



◎呑屋戸尔 黄變蝦子 每見

妹乎懸管 不戀日者無

▽我がやどに もみつかへるて 見ることに

妹をかけつ 恋ひぬ日はなし

◆我が家の庭に色付く楓を見るたびに、

あなたを心に掛けて恋しく

思わない日はありません。

田村大娘(巻八一一六二三)

たく・榜

(カジノキ)



◎多久夫須麻 新羅邊伊麻須 伎美我目乎 家布可安須可登 伊波比豆麻多年

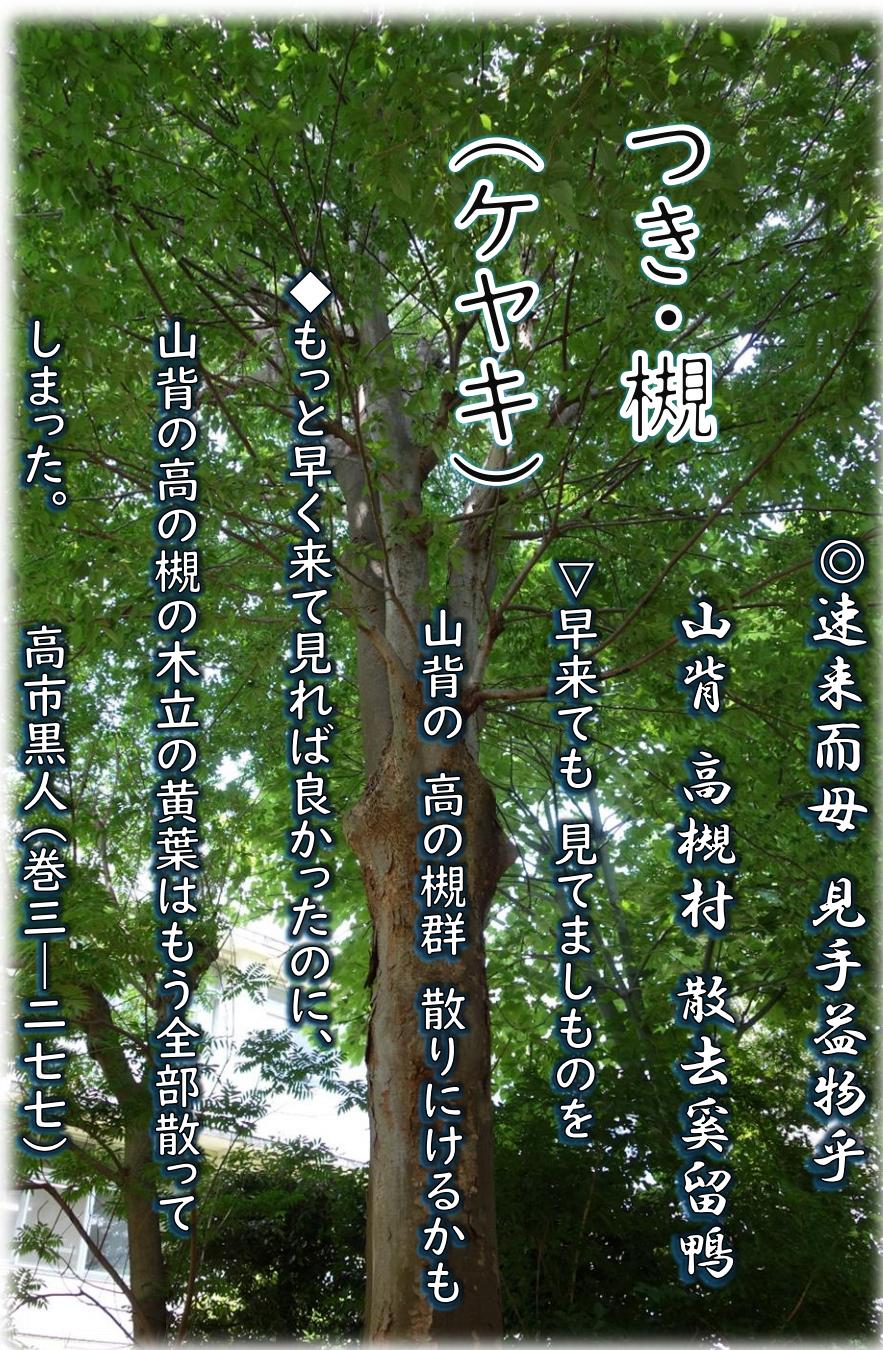
▽榜食 新羅へいます 君が目を 今日か明日かと 斎ひて待たむ

◆(榜食)新羅へ行かれるあなたに逢える日を、今日か明日かと潔斎して待ちましょ

お出でにならない。

作者不詳(巻一六一三八七一)

作者不詳(巻一五一三五八七)



◎足引 山道不知 白牧拘 枝母等乎尔 雪落者

▽あしひきの 山路も知らず 白樺の 枝もとををに 雪の降れば
 ◆山道も分からぬ。白樺の枝もたわむほどに雪が降つてゐるので。

柿本人麻呂歌集(巻一〇一一三一五)

◎速来而母 見手益物乎

つき・楓

山背 高楓村 敷去奚留鴨

▽早来ても 見てましものを

(ケヤキ)

山背の 高の楓群 散りにけるかも

◆もっと早く来て見れば良かったのに、

山背の高の楓の木立の黄葉はもう全部散つて

しまつた。

高市黒人(巻三一一七七)



◎久堅之 天原後生来 神之命 奥山乃 賢木之枝尔 白香付

木綿取付而 齋戸乎 忌穿居 竹玉乎 繁尔貫垂 十六自物
 膝折伏 手弱女之 押日取懸 如此谷裳 吾者祈余年

君尔不相可聞

▽ひさかたの 天の原より 生れ來たる 神の命 奥山の 賢木の枝に しらか付く

木綿取り付けて 斎戸を 斎ひほりすゑ 竹玉を しじに 貫き垂れ 鹿じもの

膝折り伏して たわやめの おすひ取りかけ かくだにも 我は祈ひなむ

君に逢はじかも

◆高天の原以来生まれ繼いで來た神々様よ。奥山の賢木の枝に木綿を取り付けて、
 膝を折つて拝み、手弱女として、簾を身体に掛けて、ただこんなにまでして祈つてい
 ましよう。それなのにあなたに逢えないのでしょうか。

大伴坂上郎女(巻三一三七九)



◎ 級照 片足羽河之 左丹塗 大橋之上後者

紅赤裳數十引 山藍用揩衣服而 直獨 伊渡爲兒者

若草乃 夫香有良武 樅實之 獨歟將宿 向卷乃

欲我妹之 家乃不知久

▽しなてる 片足羽川の さ丹塗りの 大橋の上ゆ 紅の赤裳裾引き 山藍もち摺れる

衣着て ただひとり い渡らす児は 若草の 夫があるらむ 樅の実の ひとりか寝ら

む 問はまくの 欲しき我妹が 家の知らなく

◆ 片足羽川の赤く塗った大橋の上を、紅染めの赤い裳裾を引き、山藍で摺り染めにし

た衣を着て、ただひとり渡つて行かれるあの乙女は、夫があるのだろうか、それとも

(樅の実の)ひとりで寝ているのだろうか、問い合わせみたいあの乙女子の家も分からぬことよ。

作者不詳(巻九一一七四二)

負うて いるますらをたちよ。

大伴家持(巻二〇一四四六五)

▽ ひさかたの 天の門開き 高千穂の 岳に天降りし 皇祖の 神の御代より はじ弓を 手握り持たし 真鹿子矢を 手挟み添へて 大久米の ますら健男を 先に立て 鞍取り負ほせ 山川を 岩根さくみて 踏み通り 国求ぎしつ ちはやぶる 神を言向け まつろへぬ 人をも和し 掃き清め 仕へ奉りて あきづ島 大和の國の 樅原の 故傍の宮に 宮柱 太知り立て 天の下 知らしめしける 皇祖の 天の日継と 繙ぎて来る 君の御代御代 隠さはぬ 明き心を 皇辺に 極め尽して 仕へ来る 祖の職と 言立てて 授けたまへる 子孫の いや継ぎ継ぎに 見る人の 語り次て 聞く人の 鏡にせむを あたらしき 清きその名を おぼろかに 心思ひて 空言も 祖の名絶つな 大伴の 氏と名に負へる ますらをの伴。

◆ 「天の岩戸を開いて、高千穂峰に天下った、皇祖たる神の御代以来、樅弓を手にお持ちになり、真鹿児矢を手に挟んで添えて、大久米のますらをたちを先に立てて鞍を負わせ、山川を岩根踏み分け通つて国を求め、荒ぶる神を降伏させ、従わぬ人をも軟化させて掃討しあしえもうして、(あきづ島)大和の國の樅原の故傍の宮に、宮柱を太く立てて天の下をお治めになつた皇祖たる天つ神の後継者だと、受け継いで來た大君の御代ごとに、隠れなき忠誠心を皇室に示し尽くして、仕えて來た祖先以来の役目である」と明言して授け給つた、その子孫たちが次々と伝えて、見る人が語り継ぎ、聞く人が模範にするだろうよ。貴重で高潔な名であるぞ。いい加減に心に思つて、かりそめにも祖先の名を絶つな、大伴氏の名を負うて いるますらをたちよ。

◎伊刀古 名凡乃君 居ニ而 物尔伊行跡波 韓國乃 虎神乎 生取尔 八頭取持来 其皮乎 多ニ孫尔利 八重疊

平群乃山尔 四月 与五月同尔 藥獵 仕流時尔 足引乃 此片山尔 二立 伊智比何本尔 桦弓 八多婆佐孫

比米加夫良 八多婆左孫 完待跡 吾居時尔 佐男鹿乃 来立嘆久 頓尔 吾可死 王尔 吾仕年 吾角者

御墨乃波夜詩 吾耳者 御墨塙 吾目

良波 真墨乃鏡 吾爪者 御弓之弓波受

吾毛等者 御筆波夜斯 吾皮者 御箱皮

御余麻須波夜之 吾美義波 御塙乃波

夜之 者矣奴 吾身一尔 七重花佐久 八

重花生跡 白賞尼 白賞尼

右歌一首爲鹿述痛作之也



◎於久夜麻能 之伎美我波奈能 奈能其等也 之久之久伎美尔 故非和多利奈無

△奥山のしきみが花の名のとやしくしく君に恋ひわたりなむ

◆奥山のしきみの花の名のよう、しきりにあなたに恋い続けること、でしょうか。

大原眞人今城(巻二〇一四四七六)



△奥山のしきみが花の名のとやしくしく君に恋ひわたりなむ

◆奥山のしきみの花の名のよう、しきりにあなたに恋い続けること、でしょうか。

大原眞人今城(巻二〇一四四七六)



◆いとしい人、我が背の君が、ずっと家に居たままで、どこかへ行くといふのは辛いといふ韓國の虎といふ神を、生け捕りで八頭捕らえて来て、その皮を畠に縫つて作り、平群の山に、四月と五月の間に薬狩にお仕えする時に、この片山に、二本立つ櫟(いちひ)の木の下に、桦弓を八張手に持ち、ひめ鏑の矢をハ本手に持つて、鹿を待つために私がいる時に、牡鹿が来て立つたまま嘆いて言つことには、たちまち私は死んでしまうでしょう。大君に私はお仕えいたしましよう。私の角は御笠の飾り、私の耳は御墨壺、私の目は澄んだ鏡、私の爪は御弓の弓弭、私の毛は御筆の料、私の皮は御箱の皮に、私の肉は御膾の材料、私の肝も御膾の材料、私の胃は御塙辛の材料に。追い果てた私の身一つに、七重にも花が咲く、八重にも花が咲くと、申し上げて誉めそやして下さい。申し上げて誉めそやして下さい。右の歌一首は、鹿のために痛みを述べて作ったものである。

作者不詳(巻一六一四四六五)

植えたあなたを。

大伴家持(巻二〇一四四八一)

◎安之比奇能 夜都乎乃都婆吉 都良ここ尔 美等母安可米也 宇惠立家流伎美
△あしひきのハツ峰の椿つらつらに見とも飽かめや植ゑてける君

平群乃山尔 四月 与五月同尔 藥獵 仕流時尔 足引乃 此片山尔 二立 伊智比何本尔 桦弓 八多婆佐孫
比米加夫良 八多婆左孫 完待跡 吾居時尔 佐男鹿乃 来立嘆久 頓尔 吾可死 王尔 吾仕年 吾角者
御墨乃波夜詩 吾耳者 御墨塙 吾目
良波 真墨乃鏡 吾爪者 御弓之弓波受
吾毛等者 御筆波夜斯 吾皮者 御箱皮
御余麻須波夜之 吾美義波 御塙乃波
夜之 者矣奴 吾身一尔 七重花佐久 八
重花生跡 白賞尼 白賞尼
右歌一首爲鹿述痛作之也

アーティスト・梧桐

(アオギリ)



◎梧桐日本琴一面 對馬結石山孫枝 此琴夢化娘子曰 余託根遙嶋之崇巒
晞轉九陽之休光 長帶烟霞逍遙山川之阿 遠望風波出入鷹木之間 唯恐
百年之後空朽溝壑 偶遭良匠散為小琴 不顧質麗音少 恒希君子左琴
即歌曰 伊可爾安良武 日能等伎爾可母 許之良武 比等能比射乃倍 和
我麻久良可武

▽梧桐の日本琴一面 対馬の結石山の孫枝なり この琴、夢に娘子に化りて曰く、「余、根を遙島の崇巒に託け、幹を九陽

の休光に晞しき。長に煙霞を帶びて、山川の阿に逍遙し、遠く風波を望みて、雁木の間に出入す。唯百年の後に、空しく
溝壑に朽ちなむことを恐れき。偶良匠に遭ひ、削られて小琴と為る。質麗くして音少しきを顧みず、恒に君子の左琴と
ならむことを希ぶ」といひき。即ち歌ひて曰く『いかにあらむ日の時にかも音知らむ人の膝の上我が枕かむ』

◆大伴旅人が謹んで申し上げます。梧桐の日本琴一面(対馬の結石山の孫枝です。)この琴は私の夢に娘の姿
となつて現れ、次のように言いました。「私は梧桐として遙かな島の高い山の上に根を張り、太陽のうるわし
い光に幹を曝しておりました。いつも靄や霞を帶びては山川のくまぐまを歩みゆき、風に立つ波を遠くに眺
めながら雁や凡庸な木々と交わっていたのでした。ただ、百年の寿命の尽きた後には谷間で空しく朽ち果て
てしまふのかと、そればかりを心配しておりました。ところが、幸いにも立派な工匠に出会うことができて、
削られて小さな琴になりました。生まれつきが悪く、音の貧しいことは顧みず、君子のそばに置かれる琴に
なりたいものと、いつも念願しているのです。」そして歌つたのでした。『それはいつの日のことでしょうか。琴に
の音を知る人の膝を私が枕にするのは。』

大伴旅人(卷五—ハ一〇題詞)

◎久礼奈為波 宇都呂布母能曾 都流波美能
奈礼尔之伎奴尔 奈保之可米夜母

つるばみ・橡 (クヌギ)



◆紅というものは色褪せるものだ。橡染めの着馴れた衣にやはり及ぶことがあろうか。
▽紅は移ろふものそ様のなれにし衣になほ及かめやも

大伴家持(巻一ハ一四一〇九)

すぎ (スギ)

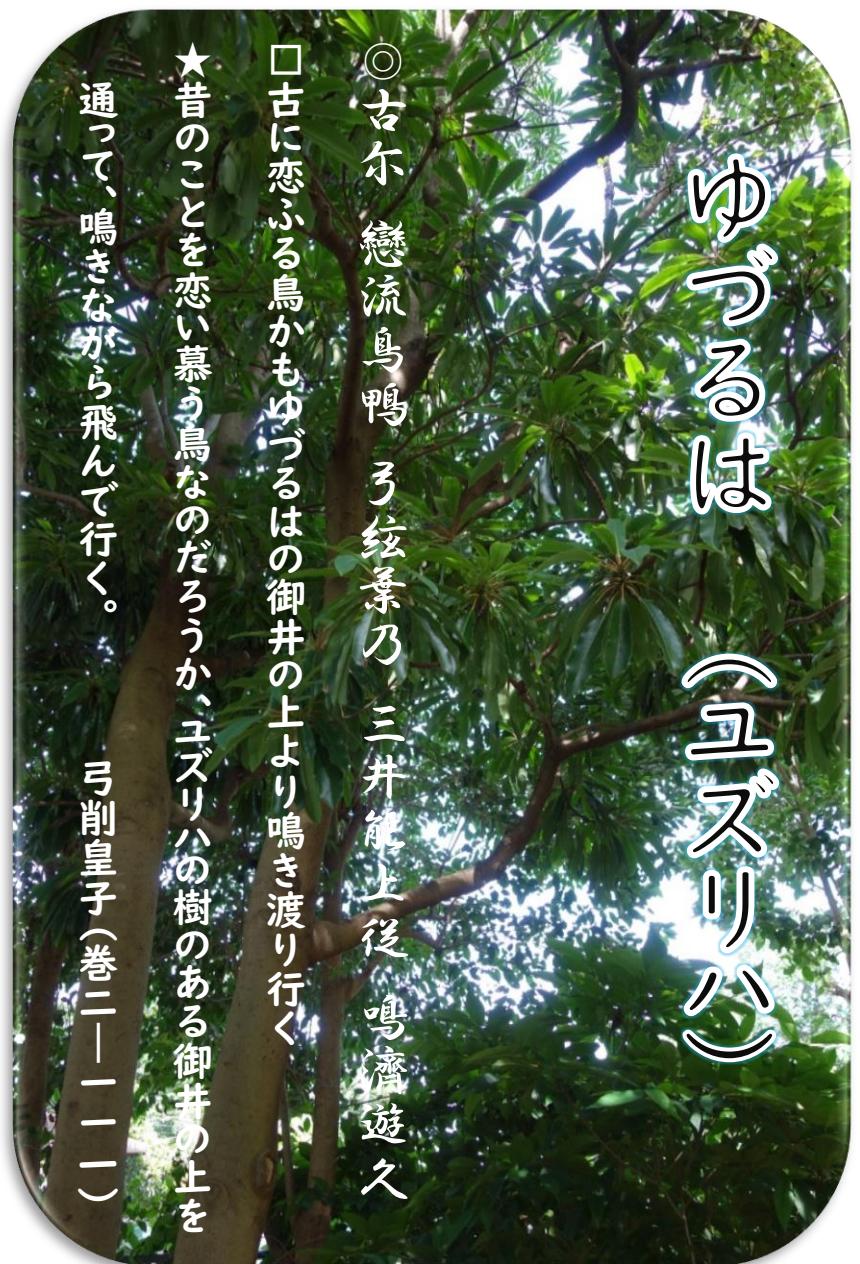


◎古 人之殖兼 杉枝 霞霏霞 春者来良之
▽古の 人の植ゑけむ 杉が枝に 霞たなびく 春は来ぬらし
◆古の人が植えたであろう杉に霞が棚引く。春が来たらしい。

柿本人麻呂歌集(卷一〇—一ハ一四)

◎ 吾園之 李花可 庭尔落 波太礼能未 遺在可母

ゆづるは（ユズリハ）



すもも（スモモ）



◆ わが庭の李の花だろうか、
庭に降つた薄雪が
まだ残つてゐるのだろうか。
大伴家持（巻一九一四一四〇）

まゆみ（マユミ）



（マニテバシイ）



◎安治佐爲能 夜敝佐久其等久 夜都与尔乎
伊麻世和我勢故 美都惠努波牟

△あぢさゐの 八重咲くごとく ハつ代にを いませ我が背子 見つゝ偲はむ

◆あぢさいが幾重にも重なつて咲くように、いよいよ久しい代までもお元氣で
いください、我が君よ。見てほめたたえるでしょう。橘諸兄(巻二〇一四四四八)

あぢさゐ (アジサイ)



【参考文献】

『万葉樹木園の栄』 和田仁ほか著・編 神奈川県立大和高等学校PTA 一九七八

『萬葉集』 鶴久 森山隆編 桜楓社 一九七七

『萬葉集一 新日本古典文学大系一』 佐竹昭広ほか編 岩波書店 一九九九

『萬葉集二 新日本古典文学大系2』 佐竹昭広ほか編 岩波書店 二〇〇〇

『萬葉集三 新日本古典文学大系3』 佐竹昭広ほか編 岩波書店 二〇〇一

『萬葉集四 新日本古典文学大系4』 佐竹昭広ほか編 岩波書店 二〇〇三

大和高校敷地内に植栽されている その他の万葉樹木

体育馆
入口前

つづ
(ツゲ)
(ヤマツツジ)

あしひ
(アセビ)

